



「コロリ予防法」（河崎家 2092）

いやす  
なおす  
たもつ



文書館資料にみる  
病気・医療・健康

11

病気と祈り④

## コレラの流行

コレラとは、コレラ菌が人体内で排出する毒素によって激しい下痢と嘔吐が引き起こされる伝染病です。コレラにかかると白色か灰白色の液状便が一日に 10 ㍺から数十㍺も出て、急激な脱水症状が起ります。特にアジア型コレラは症状の進行が早く、2～3 日のうちにくらりと死んでしまうことから、「コロリ」（虎狼猩、虎狼痢）と呼ばれました。

コレラは 19 世紀以降、数度にわたり日本列島で猛威をふるいました。当館には、文政 5 年（1822）の初上陸時から、第 2 次大戦前までのコレラ流行に関する文書・記録を所蔵しています。

### 〔文政 5・6 年の流行と萩藩〕

この病が日本列島へ上陸したのは、文政 5 年 8 月、中国・朝鮮半島を経て、対馬経由で下関に伝わったのが初めてとされています。

「密局日乗」（毛利家文庫 19 日記 18）文政 5 年 8 月 19 日条には、

「急霍乱共ニテ候哉、吐瀉等甚敷有之、只半日位ニテ病死之者多ク有之候」と、萩城下においてコレラが発生したことが確認できます。

同月 24 日条には、萩近辺のみで一日に 130 人が死亡し、その後も一日に 100 人程度の死者が出ている、との風説を伝えています。

当時、江戸にいた藩主齊熙は、江戸麻布の円明院において、9 月 26～28 日の 2 夜 3 日、病難消除の祈祷を行うよう命じ、国元には鎮護の御守札を城門などへ打つよう沙汰しています。

国元からは、満願寺・春日社・椿社・養学院・龍福寺で七日間の祈祷が行われ、同じく御守札を差し出させたことが江戸へ知らされています。同じく「密局日乗」には、まじないとして茶香葉と生姜を煎じて家内で用いること、また、急病を遁れるためのまじない歌が書き記されています。



「諸事少々控」（通番 417）  
（毛利家文庫 31 小々控 20）  
文政 5 年（1822）流行時の萩藩の対応をまとめた記事。



「密局日乗」文政 5 年 8 月 23 日条。  
（毛利家文庫 19 日記 18）  
コレラに対するまじない歌が記されている（裏面参照）。

このように、文政 5 年当時、コレラ菌やその伝染の仕組みに関する知識は皆無であり、人々は対処法が分からず、ひたすら神仏に祈るしかありませんでした。これは翌文政 6 年（1823）に再びコレラが流行した際も同様でした。

文政 6 年 8 月、再びコレラの流行が確認されると、藩は、江戸から御守札 3,200 枚、加持の芥子（けし） 1 升 5 合を「早之早飛脚」で国元へ送り、御守札を家来に 1 枚ずつ、領内の村には村ごとに 1 枚ずつ配るよう手配しています。また当時の領内総人口を 647,899 人とし、芥子は各人 1~2 粒を配る計画でした。このことから、当時、いかに藩政府・人々がこの病気を恐れていたかがわかります。

この年の流行により、楊井謙三（直御目付）などの藩役人も死去していますが、幸いにも文政 5 年と比較して流行の程度は軽かったようです。この後、文政 12 年頃までは、毎年夏前に満願寺への祈祷及び御守札の配布などが毎年行われました。

### 〔安政 5 年（1858）の流行と萩藩〕

安政 5 年（1858）7 月、長崎に入港した米艦ミシシッピー号の乗組員によって、再びコレラが日本に持ち込まれ、大流行しました。

萩藩領では、8 月に入り流行が始まり、28 日夜には、在国中の藩主敬親にも吐瀉や下痢の症状があらわれました。しかし、文政 5 年時とは異なり、萩藩内には好生館（藩医能美洞庵らを中心に創設された医学稽古場が発展したもの）があり、その中で天保 10 年（1839）に藩医として召し抱えられた青木周弼らによって蘭書の翻訳が実施されるなど、医療・医学のレベルが確実に向上していました。

藩主敬親の治療にあたった青木周弼は、敬親に対し阿芙蓉（アヘン）の内服をすすめ、刺絡を施し、その症状を改善したと伝えられています（『防長医学史』）。

好生館は、同年 8 月 29 日、蘭書の中から必要な箇所を翻訳した版本を作成し、領内に頒布しました。この原本や写しが現在も残っています。

このように、最新の医療知識を活かした対応が行われたものの、一方で、神仏への祈祷や、邪気を追い払うため台場から空砲を放つなど、祈祷やまじないも行われました。また、ペリー来航以来盛んとなった攘夷思想から、外国人が毒を流したという説が流布しました（「古谷道庵日乗」安政 5 年 8 月 16 日条）。

萩藩は同年 10 月 29 日現在で領内の死者数をとりまとめています（右表参照）。これによると、萩を中心とした日本海側の港町に大流行し、男性は女性の約 2 倍の罹患率であったことがうかがえます。

コレラはこれ以後もたびたび山口県を襲いました。特に明治 12 年（1879）には県内のみで 3,000 人を超える最大の犠牲者を出しています。

一急病通れ候ましなひ歌左之通  
風ならハ風来風と吹されに  
人に当つて何かえきれい  
棟ハ八ツ門ハ九ツ戸ハ老ツ  
わか行先ハ終の里  
棟ハ八ツ門ハ九ツ戸ハ老ツ  
みハいさなきの神代こそすめ  
右之歌を門口え張候事

コレラに対するまじない歌。  
（「密局日乗」文政 5 年 8 月 23 日条）

○安政5年(1858)萩藩領内におけるコレラ病死者数

宰判名	死去	男	女	僧侶
当島	269	168	101	
浜崎	106	60	46	
奥阿武	289	169	120	
前大津	166	106	60	
先大津	51	34	17	
美祿	17	12	5	
吉田	34	30	4	
伊崎	34	14	20	
小郡	94	67	26	1
山口	43	27	16	
山口(町方)	34	22	12	
三田尻(地方)	133	75	58	
宮市町	18	11	7	
三田尻町	5	3	2	
徳地	49	28	21	
熊毛	33	26	7	
上関	19	17	2	
都濃	55	40	15	
船木	99	63	35	1
山代	0	0	0	
大島	50	41	9	
計	1,598	1,013	583	2

  

宰判名	死去	男	女	僧侶
萩町	342			
総計	1,940			